

通信方式は短波無線による交信ということで、日本では1960年から実施された。これによって北半球域のデータの入り方はかなり改善されたが、完全というにはまだ遠程いものであった。

このCSM-IIには日本代表として私が出席を命じられた。その4年前に開かれたCSM-Iには米軍が日本代表で出席したため、気象庁からのCSMへの出席はこのときが初めてであった。CSMの会議はいつも議題が多い上に、今回は北半球資料交換組織の問題が加わったのであるから、代表たる者大変忙しい目であったわけである。

北半球天気図に関するつぎの発展段階は、1966年のCSM-IVに始まるWWW関連の世界気象通信網の整備である。これは、有線通信を主体とする高速通信である。前回の北半球資料交換組織の場合と似たやり方が取り入れられているが、通信系は新しい技術が十分に取り入れられている。日本では今里さんや上松さんなどの努力が実って世界に先駆けて立派な通信設備を作り上げ、これによって北半球天気図資料の収集は格段に改善された。

最近、予報部の現業を見学すると、機械記入による北半球天気図にお目にかかる。ひとこと違って北半球域いっぱいデータが記入されていて、すぐにも鉛筆をとって解析を始めてみたいような気分になる。今後は北半

球だけでなく、本当の世界天気図が実用化されるに違いない。それに、気象衛星の資料が加われば、いっそう天気図の威力が増すことであろう。

日本で北半球天気図が初めて作られてから40年近くたったこのごろになって、ようやく完成の域に近づいてきた。北半球天気図というようなものは、世界の多くの国の協力がなければ、決して立派なものにはならない。完成までに長い年月を要するのやむを得ないことである。

あとがき 2～3年前に、“北半球天気図を始めた頃”という原稿を天気編集委員から頼まれたことがある。当時、私はすでに気象庁を退職しており、資料を集めるのに困難も予想されたので一度はお断わりをした。しかし、今年になってまた同じ依頼を受けた。このような原稿はどうせ1人ではどうにもならないから、事情を知っている人に聞いてみて、何かまとまるようなら原稿にしようかと思って、何度か気象庁にも足を運んだ。しかし、結局はこの程度のものしか書けなかった。なお、原稿をまとめるに当たって、藤井天気相談所長、三橋資料係長(予報課)、白岡調査官(東管)、上松(元)通信参事官にいろいろお手数をかけた。謹んで御礼申し上げます。

気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
第3回リモートセンシング・シンポジウム	昭和52年11月4日～5日	計測自動制御学会	機械振興会館
第24回 風に関するシンポジウム	昭和52年11月11日		日大生産工学部 (習志野校舎)
シンポジウム「天気予報の現状と将来」	昭和52年12月1日		気象庁講堂